話題提供

過去との対話

麻生　武（奈良女子大学）

奈良女子大学の麻生です。日誌研究というのは何かなと考えた時に、私は今でも日誌研究は特別というよりも、すごく素朴に、発達心理学的というか、ものを考えていく時、ごくあたりまえの方法ではないかなと思うのですね。なぜそうなのかと言うと、今ここに皆さんがいて人間がいます。どうしてここでしゃべっているのだろう、どうしてこういう姿勢でおとなしく座っていられるのだろうといろいろ考えてみた時に、それは「どうしてこういうことになったのかな？」という起源をたどっていく、オリジンをたどってみたいという気がするのですね。その時、系統発生的なオリジンのたどり方もあるだろうけど、一人ひとり、どこかで生まれて、しゃべることを覚えて、椅子に座っていることを覚えて、そしてここにいるわけです。そのプロセスを解明していくというのが人間を理解することの一番素朴な考え方だと私は思うのです。それはどこから始まったのかと言うと目の前に赤ん坊がいたら、徹底的に見たくなる。素朴なことだと思います。

簡単な例を一つ二つほど。どういうことに感動するか。感動することが一杯ありすぎて数えきれないのですが、たとえば息子が１歳９カ月のことですけど、そのあたりを今、まとめている最中なのですが、うちの子が「とーちゅ、たーちゅ」と言えるが、まだ「３つ」は言えない、そういう時期のことです。人間ってすごいなと思うのは、文化的に数える習慣がなければ「１つ」と「２つ」は大丈夫だけど、大人ですら「３つ」、「４つ」になると間違えることもあるという論文があります。2004年にサイエンスに掲載されたアマゾンのピラハ族の人たちに関する論文です。

ところが、私たちの文化では１歳９ヶ月の子どもですら、「２つ」という

数概念をどうも獲得できているように見えるのです。子どもが１歳９ヶ月９日のことです。人形が２つ並べてあるのを見て、「とーちゅ、たーちゅ」、「たーちゅ」と言ったんですね。初めの「とーちゅ、たーちゅ」は明らかに序数的ですけれど、２回目の「たーちゅ」というのは序数ではなく基数的に感じられます。この子は１歳９ヶ月13日には、左右の手に１枚ずつ焼き海苔を手にして「たーちゅ」と言っていますから、そのことからも、この時期に基数としての「２つ」を理解していたと言ってもよいように思います。賢いなと思ったのは、１歳９ヶ月16日のときに、板の上に赤い正方形の積木を１個のせて、その横、もう１つ分のせられる板の空いているところを指で押さえ「たーちゅ、ない」と言ったことです。１を見た時に２ではないと言う。１を見て２ではないという認識ができることはものすごい能力だな、数概念の基本があるなと感動しました。１歳９カ月の子どもが「序数」と「基数」の関係をつかんでいるのではないかなと。それだけ見ただけで、私なんか、すごい、数概念はどうなっているのだろうと思うのです。こういうことが子どもを見ていたらむちゃくちゃたくさんあります。

ところが日誌研究の難しいところは、今のような話は、まとめてみると面白いと思いますけど、最初から「序数」や「基数」のことが直接個々のエピソードから見えてくるわけではないことです。「とうちゅ、たーちゅ」と言った時に「あ、面白い」と思うけど、その前に「とーちゅ」というのはどういう時に言っているのだろうか、「たーちゅ」はどう使っていたのか、同じモノが複数個あるにたいしてどう振る舞っていたのか、そういった冷静なデータがなければ面白みが出てこない。その意味で、あまり目立たない「まだ（数を）わかってないな、（言い方を）真似しているにすぎないな」というようなネガティブ・エピソードもないと、ポジティブ・エピソードが面白くないわけです。だから、子どもができなかったこと、面白くないところもしっかり見ておかないといけない。面白そうに遊べるようになったということではなくて、まだこんなに遊べなくてギャーギャーと泣いているばかりとか、オモチャをほりだしているとか、そういういろんな、まだできてない部分も見ていかないと本当の面白さが味わえない。そうすると何でも書いておかな

いといけないので、ちょっと、いささか強迫的になって、書ききれずにパニック状態になるということも生じるわけですけれど。

日誌的研究というのは学問のルーツだと思うのですが、日誌的研究をすれば、目の前のことを記述するというのはどんなに大変で、難しいことかということがよくわかるな、と思うんですね。チャールズ・ダーウィンが確か「セオリーがなくちゃ。セオリーが観察、observationを導くのだ」と言っています。理論がなくちゃ、観察ができないと言うのだけども、理論をつくるために観察しているわけですから、そこは悩ましいところで、何を観察したらいいかということがわからないから、とにかく全部、しらみ潰しにやっていかないといけないようなところがある。

論文を書いたりするには「数の認識」とか「〇〇の認識」とかに絞れば面白く書けると思うのですが、本当に面白いのは「とーちゅ、たーちゅ」と言っていて、その子がまた片方で、どういうご飯の食べ方をして、どういう眠り方をしてとかと、さまざまなことがリンクしているのが人間だと思うのですね。そういう複合的なもののあり方、やまだ先生が言われたような、ややこしい話になってくると思うのですが、人間というのは、どこがどうリンクしているのかわからないような形で歴史的生成をしていくものです。目の前にすごいことがあるわけですから、これは当然多くの人たちが注目すべきものだと思います。日誌研究は過去のある時期に流行っていたということではなくて、なおかつ新しい人たちがどんどんチャレンジしていって欲しい。とうてい一人の人間が、どのように書いても書ききれるものではない。いくら書いたって、この角度からといった、特定の角度からのものになります。どうしても自分の視野でしかモノはとらえられませんから。千人の人が日誌研究をやったら、千の視点の共通するところとか、違うところとか、さらにものの見方は、どうあるべきか、というところに進んでいくと思いますので、そこからまったく新しい地平が必ず見えてきます。ですから、日誌的な研究は、古いものとしてよりも、なお現在のものとして理解してもらいたいなと思います。

それから日誌研究という時に私がその中で思ったのは、「発達心理学の理

論」というような言い方をすると、理論というものに対する考え方が狭くなるのですね。認知モデルにしてもやっぱり狭い。なぜ狭いかと言うと、認知的な考え方をするという時の認知というあり方で、もうすでに、問題が対象化されてそういうフレームに切り取られているのですね。だけど実際に人間の「認知」の問題ではなく「認識」の問題となった時には、我々の語っている言葉が、どう成立しているかといった根源的なところから行かなくちゃいけないわけですね。私が子どもを持って一番感動したというか、思ったのは、おっぱいがほしいとか、泣いているとか、いろんな解釈があります。赤ん坊というのはその志向性、ものがほしい、喉が渇いた、何々したいという根源的な生命の志向性がありますよね。その志向性を埋めていく過程において、必ずそこに「他者」が入ってくるということです。人は、存在のあり方自体に、基本的な生物学的なニーズを叶えていくところに、すでに「他者」が入ってくるというような存在のあり方をしています。そういうことも人間を観察していくとわかってくる。そうするとこれは単なる自然科学的なものでもないだろうし、かと言って、単なる哲学的なものでもない。とにかく目の前にある子どもを理解するためには、自分自身や自分たちの文化についても考えなくちゃいけないということがありますから、単なる自然科学や認知科学でもないし、また単なる解釈学でもない。それらの諸学問をすべて含んだ、もっと広大で根源的な学的な運動（ムーブメント）ではないかと思うんですね。

だから日誌的な研究というのは人間を考えていく時の一番基本的なベースだし、いろんな学問の原点だし、そこから出発していったらいいのではないかと思うのです。そういう意味で、私はピアジェというのはすごい人だったなと思います。ピアジェは確かにソーシャルなものを捉え損ない、知の一側面だけをとらえたと言えますけど、最初にそういうことをやる人に全部期待するのはむりですね。ピアジェのどこに感動したかと言うと、普通、ピアジェのものが教科書的になると、赤ん坊は平均１カ月ではこういうふうになってというように、大体標準化されるんですね。ピアジェの研究は、事例的な個別特殊的データに基づくものだったから、それをもっとたくさんの観察デ

ータで標準化したものこそがよりサイエンティフィックだという話になっちゃうわけです。しかしながら、実際には、ピアジェはもっと歴史的な展開過程を重視しているんですね。娘のジャクリーヌはこういう吸い方をして、こういう癖があったから、こういうふうにしたと、ピアジェはそのように描いています。一人ひとりの個性的な生育プロセス、その子がその日、どういう刺激を受けて、どういう癖があって、どういうきっかけに出会っていくかという中で、その子なりの文化があり、発達があるということをピアジェは描いている。子どもたちを三人三様の描き方で、大きく括れば、こういう傾向があるのではないかと言っているわけであって、その大事なところは一人ひとりの展開過程を追っていって歴史的過程を見ています。一つの個別的な個のあり方を記述することを徹底的に尊重しています。

これは実は生態学でもこういう考え方があるらしいです。たとえば植物がどういうふうに育つか。大きな樹の横で生えている場合の木の育ち方と、大きな樹がなかった場合の育ち方と、他の樹木のあり方によって、その木の育ち方、根の張り方が違ってくる。ですから本当に生成するもの、目の前に生まれてくるのを描くためにはコンテクストを書かないといけない。コンテクストを書いていくというのは、当然、ピアジェの中にもあったと思うのです。

僕らが日誌研究会を始めた時期に少し先立つ、1970年代、特に74年～75年というのは言語研究において、ものすごくコンテクストが重視され始めた時代です。ブルーナーとかドアーとかいろんな人たちが出てくるわけです。そういう中で実際に使っている言葉の使い方だって、たとえば「ミカン」という言葉だって、どういう場面で、どう使うかと言うと数え切れないほどの使い方がある。例えば、いつもミカンがある場所にミカンがないという不在を示すために「ミカン」と声を発することもできれば、空に浮かぶ雲がミカンの形に似ているという意味で「ミカン」と言うこともできる。語用論として「ミカン」という発話行為を分類すれば４つや５つのタイプに分けられたりしますが、元を返せば、ものすごくいろんな使い方があって、それを基本的なベースの使い方として無理やり分類していくわけですね。本当は言葉でも行動でもカテゴリー化する前の素朴なものを、もう一度見直した方がいい。

既存のカテゴリー化をまず脇に置いて、自分でとらえた現象と直に対面し対話すれば、必ずや新しい見方が生まれてくる。だから日誌的研究というのは、生成するものに出会える、本当の学問に出会えるという意味で、今でも重要な場だと思うんですね。ぜひ皆さんも、日誌研究会をいろんなところでつくっていただきたいと思います。

サトウ　どうもありがとうございました。9月末に奈良女子大学で日本質的心理学会第4回大会を「歴史性・時間性との出会い in NARA」をテーマで開催することになっています。みなさん、よろしくお願いします。続いて秦野さんお願いします。